ジュラシック・パークにたどり着けない

海底木魚

www.comipo.com

ちょっと聞いて下さいますか、私の思い出話。もう２０年も前のことになるんですね、スピルバーグが映画化する！っていう立派な帯のうたい文句もありましてね、クソガキだった私は生意気にもぶ厚いハードカバーを手にとってしまったわけです。上下巻そろえると恐竜達が暴れてるパノラマになるイカした表紙は、その絵柄の迫力もあって子ども心をくすぐるには十分だったわけです。

そして読むわけです。もともと読むのが非常に遅い私は、上巻最初のほうで早くもくじけそうになるのです。

読んでも読んでもジュラシック・パークにたどり着かねー！

そう、原作は「恐竜を現代に復元させる理論」に関して前半でかなりの量をとるのです。パークに着くまでのヘリの中で、数学者イアン・マルカムがひたすらカオス理論やフラクタルについて語るのです。パークに着くまでおよそ１００ページ、延々とイアン・マルカム・オン・ステージが続くのです。恐竜に襲われる前に睡魔に襲われるのです。映画では「琥珀に埋もれた昆虫が吸った血のＤＮＡから恐竜を蘇らせた」ってことをコンパクトに説明して先に進むのですが、原作ではこの恐竜蘇らせ理論がかなり長い。イアン・マルカムが、小さいものが大きいものの相似になっててフラクタルなんだよ、分かるかい君？アホな君に分かりやすく説明してあげるよ的な感じで数学者トークを繰り広げるのです。無知な私は「すげーフラクタルすげー！」と思いながら、後年そりゃたけしも『フラクタル』ってタイトルの映画作りたくなるよ（実際は『ＴＡＫＥＳＩＳ’』になる）と妙な納得をしてしまうのです。

と、まあどんだけカオスな展開なんだよ、と思いつつ私は頑張って最後まで読みきりました。一か月くらいかかりました。

そして後日、スピルバーグの映画を観て、こう思うのです。

イアン・マルカム出番少ねー！

そう、映画は映画で立派な映画史に残るＳＦ超大作になっていたのです。今、思い出せるのもほとんどが映画のシーンとジョン・ウイリアムズの立派なテーマ曲（トランペットの高音が苦しそうな）ばかり。原作であれだけオンステージを繰り広げていたマルカムはすっごい出番減らされてました。これで良かったと思います。私にとって原作ジュラシックパークが「イアン・マルカムがひたすらカオス理論を語る小説」であるように、映画が「イアン・マルカムがひたすらカオス理論を語る映画」にならずにすんだからです。勿論、原作小説は恐竜が出てきてからの展開もスリリングで非常に面白いのですが、正直マルカムのインパクトが強すぎて他を覚えてないのです。展開も他の登場人物の名前も思い出せないのにイアン・マルカムだけはすぐパッと出る、ということは当時の私にとって彼のキャラクターはそれほどインパクトがあったのでしょう。

そして、この小説が私の人生にいかに影響を与えたか。

私は科学理論に触発されて理系の道を歩み、大学で小説を書き、それが見事映画化されるのです！

…となればエッセイとしても美しいのですが、現実はそうは行きませんでした。

まず文系に進みました。マンデブロー集合を見ようものならボディブローをくらったように倒れてしまう文系野郎Ａチームの所属になりました。マルカム博士とは頭の出来が違ったのです。

そして小説を読むどころか、約二時間で仮面ライダーディケイドのように「大体分かった」顔で

きるな、ということで映画ばかり観るようになります。だからいまだ、ハリーポッターや指輪物語の原作を全部読んだという人に会うと尊敬します。映画でもあんだけのボリュームなのに！

そして「原作と映画は別もの」という寛大な心を持つことができるようになりました。コニシキが「デーモンバンザーイ！」と言って爆発する『デビルマン』も楽しく観れました（エキストラにも参加しました。現場では一生懸命作ってました）。ハットリくんじゃなくてカトリくんじゃねーか！と思いつつ『NIN×NIN　忍者ハットリくんTHE MOVIE』も観ました（こないだトーク番組で「（両さんもふくめ）俺じゃねえよな」と自分が一番思ってますから、と香取氏が話していました。SMAPとしてのプレッシャーがあるのだな、と感じました）。パーティーに繰り出す悟空、トカゲのような神龍、極めつけのベッドで微笑むピッコロさんを堪能できるハリウッド版『ドラゴンボール』も、天津飯のように「次元が違う…！」と驚愕しながら楽しく観ることが出来ました。

だから皆さん安心して下さい。映画は原作と違ってても良いのです。マルカム博士がこの事実を私に教えてくれました。